

2016年度 呉尚浩ゼミ卒業論文

若者のU I ターン促進のために
～東北公益文科大学女子学生の意識調査をもとに
「住みたい地域」を分析する～

指導教員 呉 尚浩

東北公益文科大学公益学部公益学科

齊藤 春菜

若者のU I ターンの促進のために
～東北公益文科大学女子学生の意識調査をもとに「住みたい地域」を考える～

齊藤春菜

概要

2014年に発表された日本創生会議の消滅可能都市論をきっかけに、地方での人口減少に対する不安の高まりがみられるが、同時に地方での生活を魅力的だとする声も高まっている。全国的な移住ブームが起こり、各自治体が移住促進に力を入れている。近年では、従来の都市生活に対する消極的な考えによる地方への移住から、地方の持つ魅力や、安心・安全、子育て、働き方を重視する若い世代の移住へと変化してきている。

以上を背景に、本論では若者のU I ターンの促進のために必要なことを考察する。研究の方法としては、移住・定住や若者に関する文献調査に加え、東北公益文科大学4年の就職活動を終えた女子学生に対して、卒業後に暮らしていきたい地域や、女性から見た結婚や子育てに関する考えを探るためにインタビュー調査を行った。

インタビュー調査は、「地元について」「酒田市について」「仕事・就職活動について」「暮らす上で重視すること」「結婚・子育てについて」の5つを軸に行った。インタビュー結果から、子育てや介護に関する支援事業や助成金などの支援制度や公共交通機関の充実を求める声が多いことが分かった。それに加えて、地方での生活に対する不安要素として、仕事や人間関係などの存在が大きいことが明らかになった。不安を軽減する方法としては、実際に先輩移住者や自分と似た境遇にある人との交流などが効果的だと考えられる。

自分が暮らしていく場所に何を求めるかは、これまでの経験や考え方、年齢、性別、家族構成などによって異なり、地域や周囲の人がそれらを変えることは難しい。若者の移住を促進するためには、地方での暮らしに前向き、または選択肢の一つとして考えられる人の特徴を捉え、ターゲットに合った活動が重要だと考えられる。その活動の中で、移住者の心境を理解しながら、彼らを迎え入れる環境が整っていることを人と人との交流をもって発信していく必要がある。(795字)

もくじ

はじめに	…1
第一章 日本における国内移住	…1
1-1 地方への移住の歴史	…1
1-2 移住の種類	…4
1-3 移住・定住、交流人口の増加による効果	…6
第二章 山形県の若者の移住の現状	…7
2-1 山形県への転出入から見る移住の傾向	…7
2-2 山形県の若者のUターンの現状	…8
2-3 Uターンを実行するために必要なこと	…8
2-4 地元や地域との関係性構築の流れ	…9
第三章 学生の移住に関する意識調査	…10
3-1 インタビュー概要	…10
3-2 東北公益文科大学の概要	…11
3-3 インタビュー調査の結果	…12
3-3-1 地元について	…12
3-3-2 酒田市について	…14
3-3-3 仕事・就職活動について	…16
3-3-4 暮らすうえで重視すること	…19
3-3-5 結婚・子育てについて	…23
第四章 インタビュー調査の分析・考察	…24
4-1 インタビュー調査の分析	…24
4-2 学生の就職活動からみる傾向	…26
4-3 地方で暮らすことの魅力・課題	…27
4-4 地方での暮らしを望む人の特徴	…27
第五章 酒田市における移住について	…28
5-1 酒田市の概要	…28
5-2 酒田市の移住定住促進に関する取り組み	…29
5-3 酒田市へのU I ターン促進のための提案	…31
おわりに	…35
謝辞	…36
参考・引用文献	…36
参考・引用 WEB ページ	…37

はじめに

私は、生まれてから現在まで山形県で暮らしている。大学進学を機に酒田市に移住しており、卒業後も酒田市で暮らしていくことを選んだ。私は大学生生活を経て、地域を愛し、地域のために活動する多くの人たちと出会うことができた。その中でも特に印象に残っているのは、飛島で若い移住者たちと出会ったことだ。地元である島を活気づけようと島に戻ってきた若者と、島の魅力に引き付けられ地域に飛び込んできた若者が、小さな離島で自分らしく暮らしている。

この出会いをきっかけに、私は移住について関心を持つようになった。暮らす場所を選ぶということは、人生の中で大きな選択の一つだと思う。近年、2014年に発表された日本創生会議の消滅可能都市論をきっかけに、地方での人口減少に対する不安の高まりが明らかになった。各自治体の移住者受け入れ体制が強化され、様々な移住定住の促進に関する取り組みが行われており、移住ブームともいえる。

私は、地域の人口が増えることは、“地域の応援団”が増えることだと考えている。移住者、定住者が増加することは、地域に経済的にも社会的にもよい影響を与える。地方での暮らしに関心が高まる中で、各自治体は自分の地域を選んでもらうために何ができるだろうか。私は、まず移住者の心理を読み解くことが重要ではないかと考えている。

このことを踏まえて、本研究では就職活動を終えた東北公益文科大学の女子大学生6名を対象に、移住に関するインタビュー調査を行った。この調査をもとに、大学卒業を機にこれから暮らす場所を考える若者が地域に何を求めているのかを分析し、移住したいと思う地域と移住につながるターゲット像を明らかにしたい。第一章では、日本における国内移住について、地方への移住の歴史や移住の種類などを述べ、第二章では山形県の若者の移住の現状を述べる。第三章でインタビュー調査の結果をまとめ、第四章で分析・考察しながら、学生の就職活動から見られる特徴や、若者が思う地方で暮らすことの魅力や課題、地方での暮らしに向いている人の特徴をまとめていく。最後の第五章では、第三章と第四章をもとに本学のある酒田市を例にこれからの酒田市に合った”若者のUIターン促進のためにできること”を自分なりに提案し、若者のUIターンと地域の関わり方について論じていく。

第一章 日本における国内移住

1-1 地方への移住の歴史¹

2014年に発表された日本創生会議の消滅可能都市論をきっかけに、各自治体の移住者受け入れ体制が強化され、ふるさと回帰支援センターの相談員が配置された。翌年2015年には、29県1市がセンターに専属の相談員を置くようになった。2015年には一年間で300回

¹ 小田切・筒井（2016、p.86 - p.96）を参考に執筆。

の移住相談会やセミナーが開催されており、移住ブームと言える。ふるさと回帰支援センターとは、2002年に東京都と大阪府に設立された特定非営利法人100万人のふるさと回帰・循環運動推進・支援センター（略称：NPO法人ふるさと回帰支援センター。以下、ふるさと回帰支援センターという。）であり、ふるさと暮らし情報センター、ふるさと回帰フェア、自治体向けセミナー、ふるさと起業塾などの事業を行っている（同センターWEBページを参考）。移住ブームに伴い、単純な地域紹介では移住希望者が集まりにくく、これまで重視されてきた”子育て”というキーワードのほかに、先輩移住者の体験談や空き家の活用、働き方など、様々なテーマを持たせたセミナーが増加している。この章では、現在の移住の傾向に至るまでの背景を確認していく。

（1）1970年代の地方移住²

1970年代、農山村に向かう人の流れに変化が生まれた。1976年、これまで農山村への流入を上回っていた三大都市圏への流入を、三大都市圏から地方圏への転出が上回り、Uターン現象が起こった。その背景としては、1970年代初頭の二度のオイルショックによる景気の低迷と1977年に策定された第三次全国総合開発計画（以下、三全総）が考えられる。三全総では、「生活と生産を一体として、将来を担う若い人々や老人、婦人を含めて農山漁村住民が定住の魅力を持ち得るような環境条件を新たにつくり出すことが根本的な課題」（三全総、p2）としており、「それぞれの地域において、自然的、社会的、歴史的条件に沿って、居住環境を総合的、計画的に整備することが必要である」（三全総、p2）とし、定住圏構想を開発のコンセプトとして提起した。これにより、居住区・定住区・定住圏の三層からなる広域生活圏として定住圏が設定され、雇用の確保と生活関連施設の充実が進んだ。景気低迷により都市生活の魅力が低下し、地方の良さが見直されたことや、三全総以降に地方で雇用の場が創出されてきたことにより、大都市への人口移動の流れが弱まった。居住環境の悪い大都市からの脱都市の動きが多くメディアで取り上げられ、こうした動きは大量生産大量消費社会に対する批判から生じた有機農業運動などにも表れていた。

（2）1980年代から1990年代の地方移住³

1970年代以降の農村の工業化が進められた時期には、仕事を求めて大規模な人口移動が見られたが、農村の多くの地域は工業が定着せず、それまで同様に農業を主幹としており、1970年代後半から1980年代以降には、個人や家族を単位とした移住が見受けられるようになった。バブル崩壊後の1990年代にはこれまでの工業化や開発といった都市生活と対比して、価値観の変化や自然志向などを活用した農村の経済や社会の活性化の新たな展開がみられ、田舎暮らしの素晴らしさを前面に出した雑誌も出版されるようになった。1989年になると、Uターンに対比する形で地方に係累のない都市市民が田舎暮らしを希望し移住することを意味するIターンという言葉が登場した。1970年代は、都市生活から脱しようという思想的な移住がみられたのに対して、1980年代から1990年代は田舎暮らしそのものを

² 国土交通省（昭和52年、p.1-2、p.27）、吉川（2011、p3）を参考に執筆。

³ 吉川（2011、p10）を参考に執筆。

目的とした移住がみられ、自己実現の場として移住先を選択する移住者が増加した。1995年には、財団法人ふるさと情報センター（現・一般社団法人都市農山漁村交流活性化機構）が、移住の情報を含む地方自治体を紹介する総合アンテナショップとして東京の原宿と大阪の天保山に「ふるさとプラザ東京」を開設し、新規就農相談窓口とパソコンによる「ふるさとUJIターン情報データベース」を設置したことで、来場者が地域情報や就農支援情報を検索できるようになった。

（３） 1990年代後半から2000年代の地方移住⁴

1990年代後半になると、“憧れ”が強かった田舎暮らしから、“地域”に軸を置く暮らしである「帰農」が注目を集めた。1950年代以降に地方から都市部へ流入した団塊の世代が定年退職を向かえ、地方に回帰する動きが強まったことが背景にある。1998年、日本労働組合総連合会の呼びかけに農業協同組合中央会、日本生活協同組合連合会、経済界が呼応し、「ふるさと回帰運動」が始まった。中高年や定年退職後の世代が移住の中心層であり、第二の人生を過ごす場として地方への移住を選択する人が多かった。1990年代の終わりには、旧国土庁が若者の定住施策の一環として「地域づくりインターン事業（若者の地方体験交流支援事業）」が始まり、1994年には、NPO法人地球緑化センターが国内で初めて市町村自治体と協力し、都市と農山村の交流を目的とする若者の一年間の研修プログラム「緑のふるさと協力隊」の事業を開始した。2005年には農山漁村文化協会の『現代農業』増刊号『若者はなぜ農山村に向かうのか』が出版され、地方に移住する若者の活動が注目されるようになった。同年、国土交通省が週末の田舎暮らしや季節限定の地方暮らしなどを意味する「二世帯居住」を提唱した。

（４）リーマンショック時の地方移住

2008年、リーマンショックをきっかけに、移住の流れが大きく変化した。翌年、経済対策の一環として総務省が「緑のふるさと協力隊」を参考に「地域おこし協力隊」を、農林水産省が「田舎で働き隊！」の事業を開始し、地方に若者が一定の期間滞在する仕組みが作り出された。若者の地方における活躍に期待が高まる一方、ふるさと回帰支援センターを訪れる若者のなかには「東京に仕事がないから」「一次産業ならば雇ってもらえるのではないか」という消極的な理由で地方への移住を考える人も多かった。

（５）東日本大震災以降の地方移住

2011年、東日本大震災をきっかけに、乳幼児を連れた若い家族がふるさと回帰支援センターを訪れる件数が増加した。彼らの多くは田舎暮らしを希望するわけではなく、安全・安心な暮らしを重視し、自然災害が少ない地域や原子力発電所から遠い地域を求める相談が多く寄せられた。2013年になると、安全な地域に避難しなければならないというような衝動的な移住の動きは落ち着き、支援制度だけではなく家族のライフスタイルや子供の教育環境などをじっくり考えたうえでの相談が増加した。

⁴ 特定非営利活動法人地球緑化センター「地球緑化センターとは」を参考に執筆。

(6) 今後の地方移住⁵

近年では、都市の利便性や役割を認めつつ、「地方にこそ価値がある」「自分の生きる道は地方にある」として、田舎暮らしを望む若者が増加している。この傾向は、地域おこし協力隊などの事業が注目されていることから見て取れる。移住者の動きや対応策の変化がみられ、移住後の労働だけでなく、起業家精神を発揮させたり、新しいアイデアを実現することで移住者自身の質的側面を向上させている。地域側から見ても地域社会に新たな刺激を受けられると期待されている。一方で、都会と田舎の間にあたる、地方都市に魅力を感じ、地方での生活を選ぶ若者も増加している。阿部（2013）では「田舎ほど不便ではなく、大都市ほどごみごみしていない。地方都市はバランスが取れていてほどほどに楽しむことができる。この「ちょうどよい」感じが地方都市の魅力である」（p. 36）としており、このことは本論文の第四章のインタビュー結果からもその傾向がみられる。

1-2 移住の種類⁶

今日は、移住に対する関心が高まり移住のスタイルも多様化していることから、日々新しい移住のカタチを示す言葉が次々と登場している。言葉の多くは広く知られていなかったり、定義が曖昧だったり、独自の定義があったりする。JOIN ニッポン移住・交流ナビでは、よく耳にするU I Jターンの紹介とともに、編集部独自の定義をもって「アルファベット」+「ターン」という呼び名で新しい移住のカタチを提案している。ここでは、「動き方を示すアルファベット+ターン」「移住の目的を示すアルファベット+ターン」「地名を示すアルファベット+ターン」の3つのタイプに分類して紹介されていた10種の移住スタイルを取り上げる。

「動き方を示すアルファベット+ターン」タイプ

① Uターン

生まれ育った故郷から進学や就職を機に移住した後、再び生まれ育った故郷に移住すること。都会に移住したものの、休暇に帰省した際に、地元の良さに気づく人は多い。自然環境やゆとりあるライフスタイル、親との生活を求める移住者が多い。

② Jターン

生まれ育ったから故郷から進学や就職を機に都会へ移住した後、故郷に近い地方都市に移住すること。故郷にはない利便性と都会にはない自然環境を合わせもつ地域はどちらも望む人に需要があり、若い移住者に代表する移住のひとつである。

⁵ 吉川（2011、p14）を参考に執筆。

⁶ 一般社団法人 移住・交流推進機構 JOIN「田舎暮らし特集 | Uターン / Jターン / Iターン」を参考に執筆。

③ Iターン

生まれ育った故郷から進学や就職を機に故郷にはない要素を求めて、故郷とは別の地域に移住すること。故郷と異なる文化や時間の流れ方、人柄、物価の違いなどに刺激を受け、その地域に魅力を感じあこがれて移住する人が多い。故郷のほうが利便性に富んでいても、より良い子育て環境や起業しやすさなどを求めて移住するケースもある。

④ Nターン

工芸家や職人などが、より良い創作環境や自然環境を求めて制作拠点を変えていくように、自分や家族のより良いライフスタイル、仕事、環境などを求めて数年おきに拠点を変えていき年月をかけて最良の場所を迫及し続ける移住のこと。

⑤ Oターン

Uターンしたい気持ちはあるものの、都会での仕事や生活も捨てがたいため、地方と都心の両方でできる仕事を選び、地方と都市を行き来する生活を送る移住のこと。

⑥ Sターン

経営を学び、技術を習得し、経験を積み、開業に至るというように、起業や開業をなすうえで必要とされる過程をより適した地域で行い、起業や開業を実現するのに適した最終目的地を目指し、ステップアップしていく移住のこと。

⑦ Xターン

故郷などを拠点に、定期的に国内外の様々な地域を旅行し、気に入ればそのまま住み、しばらくすると一度拠点に戻り、もうしばらくするとまた別の地域に住む移住のこと。パソコンとネットがあればできる仕事など、場所を選ばない仕事の人に向いている。

「移住の目的を示すアルファベット+ターン」タイプ

⑧ Cターン

「Child」のCにターンをつけたもの。移住の動機が子育てであり、子供の健康のために、縁もゆかりもない土地へ移住すること。

「地名を示すアルファベット+ターン」タイプ

⑨ Aターン⁷

秋田県へのU・I・Jターンの総称である。秋田出身者もそうでない人も秋田へ来てほしいという願いから、「All turn」と「Akita」のAをかけた言葉になっている。現在、秋田県外在住者を対象としたAターン登録制度に取り組んでいる。登録者へのサービス内容としては、地域別・職種別の求人情報をまとめた冊子の提供、Aターン情報誌「あきた日和」の提供、Aターン面接会などのイベント案内、Aターン企業面接費助成制度などがある。平成3年に設立された公益財団法人秋田県ふるさと定住機構では、Aターン就職を支援するこ

⁷ 公益財団法人秋田県ふるさと定住機構「ふるさと定住機構とは」、秋田県「Aターン就職を応援します！！(U・I・Jターン就職支援情報)」を参考に執筆。

とを目的に、県内各ハローワーク、A ターンプラザ秋田（秋田県）と連携し事業を行っている。

⑩ F ターン⁸

「Fukushima」のFにターンをつけたもの。福島県へのU・I・J ターンの総称で、県独自の呼称である。福島県に特化した就職支援 WEB サイト「F ターン」では、県内企業の魅力や就職活動情報を豊富に提供している。学生がF ターン登録をすると、県が開催する就職イベント情報の郵送やメールによる提供や、地元にはないと入手できない企業情報の提供、就職や就職後の相談支援などの支援が受けられる。

以上を読んでわかるように、多様な種類が存在し該当する移住のカタチが複数あって当然だとわかる。本論文では、上記の中でも知名度が高く多くの移住が当てはまる、①のU ターンと③のI ターンを中心に論じていく。

1-3 移住・定住、外部地域との交流の増加による効果⁹

総務省は、平成 16 年度に「過疎地域における交流居住に向けたニーズ分析に関する調査」を行い、それを基に作られた資料では、交流や定住が促進されることで、経済的効果、社会的効果、教育的効果、心理的効果、その他の 5 つの効果があるとしている。

(1) 経済的効果

まず、移住定住が増加することで住宅が増えるため、新居の建築、リフォームに伴う建築業者への発注が増加する。その際には、建築資材や家財が地元で購入されることも考えられる。また、これにより、空地や空き家等が有効活用され、売却利益や賃貸料が発生してくる。

観光客や移住者が増加すると、宿泊費や土産の購入などの滞在時の消費や、地元産品の購入といった、地域消費が増加する。それに伴い、雇用の発生や農産物等の新たな販路拡大の可能性が広がる。地域の人口や交流人口が増えることで、インフラの整備も促進されていく。

(2) 社会的効果

滞在人口が増加することで地域に活気が生まれる。移住者が入ることで、地域の構成人員の多様性が生まれ、地域との交流人口が増えることで将来の定住に繋がる可能性も広がる。また、地域の定住人口が増えることで、地域文化が継承され、美しい田園景観の保全や魅力ある田舎の暮らしかたの創出につながる。特に都市部からの移住者や観光客からの評価によって、地域環境を再確認することができ、地域の魅力発見や都市住民の多様なニーズの把握ができる。

⁸ 福島県 F ターン WEB ページ「初めての方へ」を参考に執筆。

⁹ 総務省「移住・交流関係資料」p.6 を参考に執筆。

(3) 教育的効果

都市住民からの刺激によって地域の魅力が啓発される。地域文化の価値に気づき、文化の向上が期待される。

(4) 心理的効果

滞在人口が増加することで、都市住民に農林業や漁業、地方での生活などを知ってもらいきっかけになる。異なった意識、価値観を有する者との付き合いにより、住民の意識が刺激され地域の活性化につながる。

(5) その他の効果

人脈の拡大や文化交流の活性化が期待される。

以上の5つが効果として挙げられているが、地方への関心が高まっていることや、移住や起業に対する支援事業が増加していることから、新しい移住、定住、地域や人との交流のかたちが生まれ、地域にもたらす効果も多様化していくと考えられる。

第二章 山形県の若者の移住の現状

2-1 山形県への転出入から見る移住の傾向¹⁰

表 1：若者層の転出超過

(人)

	県外転入	県外転出	転出超過
18 歳	276	879	△603
19 歳	441	1,131	△690
20 歳	363	707	△344
21 歳	363	849	△489
22 歳	712	1,220	△508
23 歳	805	1,306	△501
24 歳	645	760	△115
25 歳	587	731	△114
計	4,192	7,583	△3,391

出典：山形県（2016）「平成 27 年 山形県の人口と世帯数」p. 20、表 15 より引用。

県外への転出が最も多くなるのは、高校を卒業する年齢と、大学を卒業する年齢である。県外在住の若者の生活に変化が訪れるのは、「大学卒業時」「30 歳前後」「子育て」など、20～

¹⁰ ヤマガタ未来ラボ（2015、p.3 - 4）を参考に執筆。

30代である。学校を卒業する時期以外の変化は、本人でも予想外のタイミングで訪れることもあるため、人生を見通すことは難しいと考えられる。仕事や結婚、家族の介護など、人生の変化が突然訪れたときに、Uターンという選択肢を選ぶためには、予め必要な情報を得ていることが重要だと考えられる。

2-2 山形県の若者のUターンの現状¹¹

ヤマガタ未来ラボ（2015）によると、県外転出者の約7割がUターンを検討しており、このような人たちの層を「Uターン潜在層」と定義している。そのうち、30%はUターンを実行したが、Uターンを検討したが帰らないという人は40%いる。つまり、地元に戻ろうと考えたものの、実行に至らなかった人が半数を占めている。また、Uターン潜在層に対する、「具体的にUターンする事を考えるか」という質問に対して、8.8%の人が「具体的に考えている」、56.2%の人が「何かきっかけがあればUターンを考える」、35%の人が「考えられない」と回答している。つまり、半数以上の人が何かしらの”きっかけ”があればUターンを具体的に検討することがわかる。就職、転職、転勤などの”仕事の変化”、結婚、出産、家族の看病などの”家族の変化”、恋人との別れ、アパートの契約更新時期などの”暮らしの変化”など、生活に変化があったときがUターンを実行するきっかけになりやすい。これらの変化は、県外転出した若者の多くに訪れるはずだ。しかし、Uターンを実行する人と、実行しない人（Uターン潜在層）に分かれるのが現状だ。その原因として、Uターンを実行する人に比べて、Uターン潜在層には明確な”Uターンする理由”がないことが挙げられる。特に県外での生活が長期化するほど、現在の仕事を辞めづらい、子供を転校させることが可哀想だ、地元に戻っても馴染めるかが不安だなどのUターンを選択しない理由、しづらい理由のほうが増えていくと考えられる。

2-3 Uターンを実行するために必要なこと¹²

ヤマガタ未来ラボ（2015）では潜在層のUターン実現には、Uターンしたい「意欲」とUターンできる「自信」が必要だと述べている。「意欲」としてはUターンする地域における、ローモデル（見本や憧れ）や、価値観を受容される”つながり”が関係していると考えられており、「意欲」を育てるためには、そこで暮らすことで、なりたい自分になれることや、自分が大事にしたい物事を大切に出来ることが必要だと挙げられている。「自信」としてはこれまでの経験や、雇用や住まいなどの生活の基盤が関係していると考えられており、地域で生き抜くための基盤と生活スキルを身に着けることが、Uターンできる「自信」につながると挙げられている。この2つのことはインタビュー調査からもUターンに必要な要素として見られた。

¹¹ ヤマガタ未来ラボ（2015、p.3 - 4）を参考に執筆。

¹² ヤマガタ未来ラボ（2015、p.3 - 4）を参考に執筆。

2-4 地元や地域との関係性構築の流れ

表 2 地元や地域との関係性構築の流れ

時期	行動	内容
転出前 ↓	地域や地域の大人と関わる。	地域の課題解決教育を受ける。ローモデルを見つける。
転出後 ↓	地元とのつながりを楽しむ。応援する。	地元の産品販売の手伝いや地元の魅力を情報発信する。県人会などに参加する。
↓	Uターンについて話す。軽い相談をする。体験する。	転出先で開催される地元のイベントに参加する。WEB ページや地元の人から情報収集をする。
↓	主体的にプロジェクトに参加する。	前の段階よりも積極的に地域と関わる。地元の団体のプロジェクトに参加する。
↓	二拠点住居にする。	転出先と地域を行き来する。仕事や住まい、コミュニティなど実際に移住するために必要な情報を具体的に収集する。
地元に戻る	Uターンを実現させる。	拠点を地域に移し、就転職、起業をする。

出典：ヤマガタ未来ラボ（2015、p.4）の図を参考に筆者作成。

Uターンをする理由のできる・できない、できるまでにかかる時間は人によって異なっている。Uターンする理由づくりには、地域との関係性を構築していくことが重要だ。表2は、地元を転出する前から転出後に地元に戻るまでの関係性の構築のための行動の流れをまとめたものである。転出前は、本人の移住意識に関わらず、学校教育や日々の生活の中で誰にでも当てはまる経験だといえる。この時期の該当者が最も多く、表の下に進むにつれて移住の具体性が高まり、該当者も減少していく。

表2より、地元との関係性は様々な段階で構築することができ、その方法も多岐にわたることがわかる。どの段階を見ても、そこには人と人との出会いや交流が必要不可欠だ。学校教育を通して地域を知る段階では地域の大人が、転出後はイベントの関係者や地元の友人や家族が、移住を考える段階では仕事や住まいについて相談できる人が必要だ。行政やNPO法人、企業、学校、地域住民などが様々な角度から連携して地元とのつながりを構成し、転出者を仲間として迎え入れる姿勢を見せることで、自分なりのUターンするきっかけを見つけやすくなると考えられる。

続く第三章では、本学の女子大学生を対象に、それぞれの地元や酒田市での生活、就職活動を経て、地域や暮らしなどの移住に関する考えを探っていく。

第三章 学生の移住に関する意識調査

この章ではインタビュー調査の結果をまとめ、続く第四章で結果の分析と考察を述べていく。

3-1 インタビューの概要

就職活動を終えた、本学4年生の女子を対象として、6名にインタビューを実施した。インタビュー内容は、大きく分けて、「地元について」「酒田市について」「仕事・就職活動について」「暮らすうえで重視すること」「結婚・子育てについて」の5つを軸に意識調査を行った。また、インタビューの対象を4年生に限定することで、実際の就職活動中の心境や、これから住む場所を考えるうえで何を重視しているかを探る。加えて、女子学生に限定することで結婚・子育てについての考え方を探る。分析の仕方としては、A、B、Cさんを「地元を離れるグループ」、D、E、Fさんを「地元に戻るグループ」に分けて、それぞれの質問項目への回答をまとめ、両グループの相違点や共通点を挙げていく。加えて、BさんはUターン希望者であるため、3-3-3（仕事・就職活動について）では、地元に戻るグループに対する調査内容にも協力していただいた。表3は、インタビューに協力して下さった6名の学生の情報をまとめたリストである。なお、彼女たちは地方都市部または地方都市部にほど近い農村地域出身者であり、本論文の「地元」とはこのような地域を示している。

表 3：インタビュー協力者のリスト

グループ	協力者（在学中の住まい）	地元→大学（酒田市）→勤務先（転勤の有無・住まい）→今後の予定	家族構成
地元を離れるグループ	Aさん （実家）	庄内→大学→東京都（転勤あり・アパート）→未定	父・母・姉（東京都）・A
	Bさん （アパート）	山形県外→大学→東京都（転勤なし・寮）→地元	祖父・祖母・父・母・B・妹・弟（東京都）
	Cさん （アパート）	山形県外→大学→仙台市（転勤あり・アパート）→未定	祖父・祖母・父・C・弟
地元に戻るグループ	Dさん （アパート）	山形県内→大学→地元（転勤あり・実家）→未定	父・母・兄・D・妹
	Eさん （アパート）	山形県内→大学→地元（転勤あり・実家）→未定	祖母・父・母・兄・兄・E
	Fさん （実家）	庄内→大学→地元（酒田市）（転勤なし・実家）→未定	父（単身赴任）・母・F

出典：インタビュー結果より筆者作成

3-2 東北公益文科大学の概要¹³

インタビューするにあたり、筆者及び、A～Fさんが在学している本学について説明していく。以下の情報は、東北公益文科大学学部に限られ、東北公益文科大学大学院を除く内容である。

大学名： 東北公益文科大学

学部・学科： 公益学部・公益学科

系（コース）： 地域経営系（経営コース、政策コース、地域福祉コース）
交流文化系（国際教養コース、観光・まちづくりコース）

所在位置： 山形県酒田市飯森山

学生数： 680人（男性431人 女性249人）※2016年5月現在。

1996年、21世紀という新たな時代を切り開く人材育成と学術研究機能の充実を図られ、近年の産業の高度化や海外との交流などの新時代を支え課題に対応する高度な知識を持つ

¹³ 学校法人東北公益文科大学（2005、p.3 - 5、及び p.10）、学校法人東北公益文科大学（2017、p.6）、東北公益文科大学ホームページ「大学総合案内」を参考に執筆。

人材を地域で育成し、加えて、若年人口の定着による地域活性化が期待された。庄内に4年制大学を設置実現に向けて山形県と庄内地域14市町村で検討、協議が始まり、2001年4月に開学となった。学問領域は、これからの社会に必要不可欠である「公益学」とし、運営形態は、県と周辺市町村の支援の基、学校法人が運営する「公設民営方式」となっている。現在、文部科学省が2013年度から取り組む、地域を施行した教育・研究・社会貢献を進める大学への補助事業である地（知）の拠点整備事業に取り組んでいる。「地域力結集による人材育成と複合型課題の解決－庄内モデルの発信－」をテーマに、連携自治体、協力団体とともに地域の人材育成と地域課題解決に取り組んでいる。

3-3 インタビュー結果

「地元について」「酒田市について」「仕事・就職活動について」「暮らすうえで重視すること」「結婚・子育てについて」の5つの軸ごとに、インタビュー結果をまとめていく。

3-3-1 地元について

自分の地元がどの程度好きかを聞き、その理由を調査した。また、地元で暮らすことへの不安・不満にはどのようなことがあるか調査している。

(1) 地元に離れるグループ・・・Aさん・Bさん(将来的にUターン予定)・Cさん
○地元は好きか。

(「好き・どちらかと言えば好き・ふつう・どちらかと言えば嫌い・嫌い」のどれかで回答。)
Aさん) どちらかと言えば嫌い。

地元の魅力もあるが、固定された価値観や、狭いコミュニティが嫌だ。自然環境も苦手
で、できれば晴れの日が多く暖かいところに住みたい。平凡な日常生活に刺激を感じられない。地元で暮らす良さとしては、出費が少ないことだと思う。周りがオシャレに気を使
いすぎているため安いもので代用できたり、買いすぎなくて済む。また、実家にいけば
家賃や食費も浮く。近所や祖母から野菜などをもらうことも多い。

Bさん) 好き。

今まで自分が一番長くいた場所だし、地元に残っている友達も多いから好き。土地が好
きというよりも、友達や家族がいるから好き。

Cさん) ふつう。

場所としては嫌いではないし、好きな場所もある。しかし、実家が好きではないため、
地元というと実家を思い出して「好き」とは言えない。

○地元で暮らすことへの不安・不満はなにか。

Aさん) 閉鎖的な価値観・生活環境

閉鎖的な価値観が好きではない。特に仕事面でそう感じた。地方での仕事は、公務員と工場と農業などの一次産業しかないイメージがある。親や親戚も口を揃えて公務員になるように勧めてくる。そこに「公務員絶対主義」のようなものを感じる。また、自然環境で言えば、曇りの日が多く暗いため気分も暗くなってしまいそうだ。生活環境としては、狭いコミュニティが好きではない。どこに出かけても、知人に会うし、「何日の何時頃〇〇に××さんといたよね」などと言われることもあり、ずっと誰かに監視されている気分になる。また、新幹線が無いと遠出しにくい。

Bさん) 家族の将来のこと

両親や祖父母の介護を誰がするのか、誰が家を継ぐのかが不安。自分は東京で働いた後、地元に戻りたいと思っているが、東京で結婚相手を見つけて地元に戻ったとき、二人とも無職の状態では結婚生活をスタートできるのかも心配。

Cさん) 家族とのかかわり方

実家が好きではない。そのため、地元に対して特に不安や不満があるわけではない。

(2) 地元に戻るグループ・・・Dさん・Eさん・Fさん

○地元は好きか。

(「好き・どちらかと言えば好き・ふつう・どちらかと言えば嫌い・嫌い」のどれかで回答。)

Dさん) どちらかと言えば好き。

地元の雰囲気が好き。馴染みがあり、大学から地元に戻ると懐かしい。「地元 = 実家での生活」というイメージがあり、実家に居づらかったという気持ちから、地元も居づらい場所だったような気がする。

Eさん) どちらかと言えば好き

ふるさとだと思ふし、ホッとできる場所である。出かける場所がないことが少し残念だと思ふ。

Fさん) どちらかと言えば好き。

完璧な街ではないけれど、暮らしやすい場所だと思う。中学生になるまでは宮城県や岩手県で引っ越しを繰り返していたが、地元にある祖父母の家によく通っていたため最も馴染みがあり、「地元であり、落ち着く場所だ」と思える。引っ越しを重ねた分、どこにいても自分はよそ者だという意識があったが、地元に戻ると馴染みの言葉や雰囲気に安心する。

○地元で暮らすことへの不安・不満はなにか。

Dさん) 人間関係。

実家にいると、親の介入が多く、監視下に置かれている気がする。大学に入学する前の自分を知っている、親や親戚、同級生にはあまり会いたいとは思わない。地元の家族や学校では今までの自分の「立ち位置」や「役割」があり、振られる冗談や対応などが決まっているため、昔の自分と変わっていても昔のキャラクターを押し付けられているような気がする。決められたイメージを少し演じるように過ごすことが疲れる。

Eさん) 結婚したいと思える相手がいない。

地元においても異性との出会いがないと思う。同年代の人はいると思うが、農家など限られた職種の人ばかりいるイメージがある。また、他の地域の人と結婚することになれば、自分が地元を出ていくと思うし、相手も私の地元には来ないと思う。また、出歩く場所が無いこと、農地が多くどこを見ても同じような風景が続くことから地元に飽きてしまった。

Fさん) 公共交通機関が充実していない。

交通機関が無いわけではないが、本数が少ないため気軽に出かけられない。近場ならば時間を気にせずに車で出かけられるが、遠出するときには電車やバスなどを利用したい。その他には、強風や雪が多いことが面倒だと思うことがある。

3-3-2 酒田市について 自分の地元がどの程度好きかを聞き、その理由を調査した。また、地元で暮らすことへの不安・不満にはどのようなことがあるか調査している。なお、Fさんは3-3-1と同じであるため省略している。

(1) 地元を離れるグループ・・・Aさん・Bさん(将来的にUターン予定)・Cさん
○酒田市は好きか。

(「好き・どちらかと言えば好き・ふつう・どちらかと言えば嫌い・嫌い」のどれかで回答。)
Aさん) ふつう。

地元と酒田市が近く環境も似ているため、「地元が好きか」の回答とほぼ同様になる。しかし、どちらかと言えば地元よりも酒田市のほうが住みやすい地域だと思う。地元は駅付近だけにお店や施設が集中しており、駅付近から離れると本当に何も無い。バスも少ない。酒田市は、どこまで行っても100円で乗車できる市内循環バスがあるし、大学生には無料で回数券を配布してくれるのでありがたい。市や地域の方は大学に様々な面で支援や協力をしてくれるから、応援されているようでありがたい。

Bさん) 好き。

水や食べ物が美味しい。自分の中では、食が酒田市の一番の魅力だと思う。山居倉庫などの歴史的な建物が綺麗に残っているのも魅力だと思う。親切な人が多く、親しみが持て

る。地元にはない風力発電が身近にあることに感動した。

Cさん) ふつう。

いい意味でも悪い意味でも、何もない場所だから。いい意味としては、ゆったりと生活できるし、都会に出かけるときには「特別感」を引き出してくれること。自分は舞台鑑賞が趣味だが、都市部では毎日のようにイベントが行われていて全てに参加すると一つ一つの余韻に浸る時間が無い。悪い意味では、歴史的な建物などの観光地はあるが、若者向けの観光地や娯楽施設が少ない。

○酒田市で暮らすことへの不安・不満はなにか。

Aさん) 「地元で暮らすことへの不安・不満はなにか。」と同様の回答になる。

Bさん) 公共交通機関が充実していない。

車が無ければ何をすることも不便だと思う。仕事は探せば十分にあると思う。

Cさん) 若者向けの観光地や娯楽施設が少なく、あっても行きづらい。

映画館や若者が集まる観光地などが無い。娯楽施設やカフェ、お店などもあるが、大学付近にはほとんど無いため、車を持たない学生は本数の少ないバスを乗り継ぐなど、移動がしづらい。

(2) 地元に戻るグループ・・・Dさん・Eさん

○酒田市は好きか。

(「好き・どちらかと言えば好き・ふつう・どちらかと言えば嫌い・嫌い」のどれかで回答。)

Dさん) ふつう。

殺風景な雰囲気を感じる。酒田市の人、地域色が強い気がする。言葉や食文化が地元と異なるため、自分はよそ者だと感じるし、どのような切り口で地域に馴染んでいけばよいか分からない。フィールドワークのある授業やサークルに入ったりしなければ、自分から地域に入っていくことは難しいと思う。様々なイベントがあるが、参加してもその時だけの盛り上がり、その時だけの交流になってしまう。学生の中には活発に地域活動に取り組む人もいるが、いつも決まった人になっていて、気になるイベントや活動があっても何となく参加しにくい。決まったグループや難しいワークショップなどではなく、気軽に地域に入っていくきっかけが欲しい。また、破れたカーテンや障子が見える空き家が多く、怖い。気候的には風が強いため運転しづらかったり、風の音が怖いときがある。大学生時代を過ごした場所だから、酒田を嫌いにはなりたくない。魅力もあるため、嫌いになるにはもったいない気がする。

Eさん) どちらかと言えば好き。

大学があるからそこにいるという感じがする。就職活動をしていても大学の知名度が低いし、近くにほかの大学がないため少し疎外感を感じる。ワークショップや地域のイベントに積極的に参加してはいるが、自分はよそ者だと感じることも多く、地域に対して心を開けていない。方言とか食文化など違って面白くもあるけれど、地域に馴染めないところもある。

○酒田市で暮らすことへの不安・不満はなにか。

Dさん) 落ち着く居場所がない。地域に入っていく機会が無かった。

大学に在学して4年間酒田市で過ごしてきたが、大学とアパートとアルバイト先との往復ばかりであり地域に入っていく機会が無かった。日中に市内を散策しても年配の人がぼつぼつといるばかりで街に活気がないと思う。地元の人だけが行くような店の対応は少し冷たい気がするし、人が少ない店に入ると渋々腰を上げるような店主もいて来店したことを申し訳なく思こともあった。大学以外に気軽に会える人もいないし、在学中よりもさらに地域と関わる機会がなくなると思うと孤独に感じると思う。

Eさん) 地震発生時の津波が心配。

酒田市は海が近いため、津波が心配。また、車が無ければできないことが多いことも不満。

3-3-3 仕事・就職活動について

就職活動を終えて、仕事を選ぶうえで重視したことと、活動中の情報収集方法を調査した。

(1) 地元を離れるグループ・・・Aさん・Bさん(将来的にUターン予定)・Cさん

○仕事を選ぶうえで重視することはなにか。

Aさん) 「東京」という場所と新しい刺激

「東京」という場所を重視した。業界や業種にこだわりはあまりなく、様々な分野で就職活動をした。東京都には全国から多くの人が集まるから、地元にはない様々なものがそこにあるのだと思う。日本の最先端や地方には無い仕事、エリートが集まる場所で、厳しい社会に揉まれながら成長したい。職場を選ぶうえでは、東京都で働けることと会社の社風や社員の雰囲気重視した。

Bさん) 新しい刺激と業種

一度、地元を離れて今までとは違う刺激を受けてみたい。業種は体を動かしたり、現場で活動できることを軸に選んだ。職場を選ぶうえでは、東京都での仕事は経済面に不安があるため、寮などの施設が充実していることを重視した。

Cさん) 趣味を充実させられる場所

趣味を充実させたいという思いが強く、それを実現させられる場所を重視して職場を選んだ。自分の趣味である舞台鑑賞は、地元や山形県では十分に出来ない。東京都での就職活動はお金がかかるため、後半は仙台市での就職活動に切り替えた。業種に強いこだわりは無かったが、就職活動をするうちに、観光業やサービス業に絞って活動した。

○就職活動に関する情報をどこで得たか。欲しかった情報はあるか。

Aさん) 東京都での半年間のシェアハウス生活

東京都での就職活動中は、半年間、就活シェアハウスに住んでいて、そこで多くの情報を得た。企業説明会などにも参加したが、シェアハウスで生活することで、様々な企業の人と交流ができた。就職活動中の学生と友達になれた。学生の中には「ピザリーチ」や「肉リーチ」(社会人と話したい学生と、学生と話したい社会人をマッチングして、普段着で食事を楽しみながら、仕事や働くことなどについて語り合う交流会)などに参加する人もいた。また、半年間、東京都で生活してみることで、これから自分が東京都で暮らしていく姿がイメージしやすくなった。就職活動に関するサイトを見るよりも、実際に人と交流したり、住んでみることで得る情報を重視していた。

欲しかった情報としては、就職活動や仕事とは関係ない第三者の声も聴きたかった。シェアハウスでのつながりは就職活動が中心にあったため、プライベートなことやコミュニティ、東京都での生活の経済的な見通しなどを相談できる人に出会いたかった。また、情報に関して言えば、地元にいると現地の情報が遅れて伝わってくるが多く、東京都で生活し始めてから採用に関する情報などを知ることもあった。

Bさん) 大学のキャリアセンター

大学のキャリアセンターで情報を得ていた。もともと、公務員に軸を置いていたため、民間企業の就職活動には、あまり時間をかけていなかった。キャリアセンターで相談に乗ってもらいながら、自分がやりたい仕事の条件に合う会社を紹介してもらい、そこに決めた。

会社の寮に関する具体的な情報を知りたかった。また、山形県や自分と同様に岩手県から東京都に出てきて生活している人に、経済的な見通しや暮らしに関する体験談を聞ければよかったと思う。

Cさん) 就職活動支援サイト

主に大学で紹介された、リクナビやマイナビなどの就職活動支援サイトから情報を得ていた。その他には、ゼミで就職活動を報告しあって情報交換をしたり、仙台市に住んでいた先生から当時の生活について聞いたりした。就職活動を行う空き時間には、駅や会社付近を散策するようにしていた。

仙台市での就職活動では、就職活動の支援をもっと充実させてほしいと思った。東京都では、就職活動を支援するシェアハウスやカフェがあり、同世代で違う業種を志望している人とも交流できて、自分一人では得られなかった情報や刺激を受けることができた。仙台市での就職活動は、説明会や面接などがある日に通うだけで、生活の感覚をつかめなかったり、自分と同じ会社を受ける人としか交流できなかった。

(2) 地元に戻るグループ・・・Bさん(将来的にUターン予定)・Dさん・Eさん・Fさん

○仕事を選ぶうえで重視することはなにか。

Bさん) 教育に関わる仕事であること

東京都での生活を終えた後には、地元で教育に関する仕事をしたい。大学で学んだことを生かして、塾講師や学校の講師として働きたい。

Dさん) 今までの自分を変えられる業界であること

大学で専攻していたコースの分野は自分に合っていないと感じていたため、分野外のことをしたかった。接客業に挑戦することで、自分の人見知りなところなどを克服したい。自分にできることを増やすための、1つのステップにしたいと思った。

Eさん) 会社の雰囲気と、人と関われる業種であること

会社の雰囲気を重視した。仕事を続けていくためには、良い人間関係を築けることが必要不可欠だと思う。その他にも、経営理念や社長の考えもよく調べて職場を選んだ。工場や単純作業を繰り返す業種は息が詰まる。記念館でのアルバイト経験などを生かして、幅広い年代と接することができる業種(接客業)を選んだ。最初は場所も業種もなんでもいいと思っていたけれど、就職活動を進めていくうちに、東北地方か山形県内で働きたいと思うようになった。

Fさん) 福祉に関する仕事であることと、地元であること

大学で学んだ福祉の知識や経験が生かせる仕事がしたい。地元を離れるつもりはなく、酒田市内に限定して就職活動をした。

○就職活動に関する情報をどこで得たか。欲しかった情報はあるか。

Bさん) 将来、地元に戻るつもりでいるため、まだ就職活動をしていない。

Dさん) 就職活動支援サイト

大学で紹介されたリクナビやマイナビなどのサイトと、自分で見つけたサイトから情報を得ていた。大学のキャリアセンターや掲示板の情報も少し見ていた。その他には、合同

説明会に参加したりしたが受けたものはほとんどなかった。

その他に欲しかった情報は特にない。

Eさん) 企業説明会やOB・OG訪問、大学の就活サポーターの先輩

就職活動支援サイトや企業説明会での情報は広く浅く見ていた。気になる企業については実際に客として支店を訪問して職場の雰囲気を見たり、同じ企業を受けた先輩に採用までの記録や職場のことを聞いたりした。大学の就活サポーターの先輩方に相談することも多く、知らなかった企業を紹介してもらったり、勉強の仕方や試験や面接の体験談などを幅広く聞くことができ参考になった。

欲しかった情報としては、先輩の就職活動の失敗談をもっと聞きたかった。効果があったことだけでなく、やってみてダメだったことを聞ければ自己アピールの仕方を考えやすかったと思う。加えて、交通費や宿泊費などの就職活動費を抑える情報も知りたかった。

Fさん) 福祉の勉強の一環で訪問した実習先

実習で訪問した施設から受験の誘いを受けてそこに決めた。働くことに関しては実習中に体験してみて情報を得ていた。就職活動支援サイトは利用せず、友人との情報交換や、大学のキャリアセンターや掲示板を少し利用した。欲しかった情報としては、実習ではなく実際に働く職員の体験談や、採用試験や資格を取るための勉強法や過去問の情報が知りたかった。

3-3-4 暮らすうえで重視すること

今後、暮らしていく場所を考えるうえで何を重視しているのかを調査した。さらに、現時点で、今後の暮らす場所を変えるつもりはあるか、地元や酒田市で住む場合に何を求めるかを調査した。加えて、地元を離れるグループに対しては、離れた後に地元とどのようにかかわりたいかを調査した。

(1) 地元を離れるグループ・・・Aさん・Bさん(将来的にUターン予定)・Cさん
○暮らす場所を選ぼううえで重視することはなにか。

Aさん)「東京」という場所と新しい刺激があること。

仕事を選ぼううえで重視することと同様で「東京」という場所と日々の新しい刺激を重視する。様々な人と出会って刺激を受けて、自分の成長につなげたい。

Bさん) 家の近くに病院や学校、駅などの施設があること。

実家に何かあったときにすぐ帰れるように、公共交通機関が充実したところに住みたい。特に、子供が生まれてからは病院や学校などの施設は近くにあってほしい。治安が良いかどうかとも重視したい。

Cさん) 趣味を充実させられる場所であること。

趣味である舞台鑑賞を充実させられることを一番に考えている。そのために仕事や住む場所が必要だと思う。年齢を重ねても、芸能そのものに飽きることはないと思うため一番に優先できる。

○今後、地元に戻りたいと思うか。戻る可能性はあるか。

Aさん) 戻りたくない。お盆の時期や正月に帰省するくらいがちょうど良い。戻る可能性も、今のところはない。転勤するとしても、九州地方など、南のほうへ行きたい。

Bさん) 絶対に戻りたい。東京で働いた後、転職して地元に戻るつもりでいる。最短でも5年間は東京で働きたいと考えているが、一度やってみたかった東京での生活に満足したら帰る予定でいる。

Cさん) 今のところは、戻りたいと思わない。将来、地元に戻る可能性はあると思う。これから働く会社は地元には支店がないため、転職を考えるとときに地元も選択肢に挙がると思う。定年退職後にゆっくり過ごすために地元に戻ることも十分に考えられる。

○地元との交流や情報が欲しいか。それはどのようなものか。

Aさん) お盆や正月に地元へ帰省するくらいの距離感がちょうどいいと思う。食べなれた「食」が離れてしまうことがさみしいため、東京都で山形県の物産展などのイベントやアンテナショップがあれば行ってみたい。芋煮の時期には帰省して高校や大学の友人たちと芋煮会をしたい。

Bさん) 東京都で地元に関するイベントがあれば行ってみたい。地元の世界遺産や観光地を東京でアピールしてほしい。地元であるお祭りにも参加したい。特に、自分の地区で厄年の人が集まって踊るお祭りに出たい。厄年の人には踊りのビデオが送られてくるため、しっかり振付を覚えて参加したいと思う。他に欲しい情報としては、東京都から地元へ帰るときの就職先の情報や、祖父母のことが心配なので施設の情報が欲しい。

Cさん) 今は個別に情報や連絡が欲しいとは思わない。地元の情報が欲しいときはFacebookなどのSNSで見える。転職や老後のことを考えるときに暮らしに関する支援制度などの情報が欲しい。地元の就職情報や老後の施設や受けられる支援について知りたい。自治体のHPを見ると思うが、地元の観光情報が載った雑誌やウェブページなどに暮らしの情報があれば目につきやすいと思う。

○地元や酒田市に住んでもよいと思う条件はなにか。

Aさん) 出かけた先での人口密度が高いこと。

もっと栄えていて、人が多く活気があれば住んでもよいと思う。程度としては、出かけた先で顔見知りの人がいっても気づかれない程度の人込みが過ごしやすい。

Bさん) 子育て支援と定年退職後の支援が充実していること。

子供の数によって手厚い支援を受けられるなどの子育て支援が充実してほしい。また、自分が定年退職した後にも働く場所が欲しい。

Cさん) 若者が過ごしやすいこと。

例えば、大学の近くにカフェやお店を増やしたり、大学前経由のバスの本数を増やすなど、車を持たない学生でも移動がしやすいと住みやすい。仕事はあるとは思いますが、選択肢は少ないと思う。遠出したいから新幹線もあってほしい。

(2) 地元に戻るグループ・・・Dさん・Eさん・Fさん

○暮らす場所を選ぼうえで重視することはなにか。

Dさん) 仕事と子育てが両立できること。

職場に近く、結婚して子供がいれば保育園が近いところがいい。仕事や家族を持つと、それらを優先して二つを両立しやすい場所を選びたい。仕事や家族以外では、近くに素で話せる友達や信頼できる人がいる場所に住みたい。また、休日に一人でゆっくりできる場所も欲しい。

Eさん) 仕事があること。

第一に働く場所があることを重視したい。生活していくためにはお金は必要不可欠であるし、結婚しても専業主婦にはなりたくない。働く場所があって、次に家族の意見を聞き住み場所を考えたい。

Fさん) 経済的な負担が少ないこと。

実家に住むことで家賃や光熱費などの負担が少ない。結婚して実家を出ても実家が近かったり地域に親しい人がいれば、おすそ分けをしあったり助け合うことができると思う。その他には、自然災害が少ない、または対策がしっかりされていることを重視したい。近くにいてほしいという家族の意見も尊重したいと思う。

○今後、地元を離れたいと思うか。離れる予定はあるか。

Dさん) 予定はないが、一度は県外に出て暮らしてみたい。

離れるか離れないかにこだわりはない。仕事に合わせて暮らす場所を考えるけれど、ずっと地元で働くだけでなく、一度は県外で暮らしてみたい。県外に出た後、地元に戻るかはわからないけれど、親の介護などを考えると戻らざるを得ないだろうと思う。

実家から職場に通えることは、経済的に良いと思う。働き始めは実家にいるが、お金を貯めて一人暮らしをしたい。実家での自分のスペースやプライベートが確保できれば実家で暮らしてもよい。

Eさん) 離れたいと思う。

地元や県内にいたいというこだわりはない。地元以外に転勤してみたいと思うし、結婚を機に他の地域に住みたいと思う。ずっと実家にいると家族と鬱陶しいと思うこともあるし、兄が実家にいるためずっと実家にいることはないと思う。結婚相手が自分に合わせてくれるならば、実家に近いほかの市町村に住みたい。

Fさん) 離れたいと思わない。

実家を離れたいとは思うが、地元は離れたくない。ずっと通っている基督教の教会があるし、地元には愛着がある。一人っ子であるため、実家の近くにいってあげたいと思うし、実家に住んでいるうちは経済的に良い。結婚するときには、地元の人と結婚するか、相手が私の地元に移住してきてほしいと思う。

○地元や酒田市に住んでもよいと思う条件はなにか。

Dさん) 仕事の選択肢があること。

地元でも酒田市でも、仕事の選択肢が増えてほしい。仕事があっても、人手不足過ぎて一人当たりの負担が大きそう。年齢が近い社員がいる職場が良い。

Eさん) 子育てしやすい場所であること。

ずっと住むことを考えると、子育てしやすい場所かどうかを重視したい。酒田市の場合は地元ではないため、子育てに協力してくれる人が少ないのではないかと少し不安に思う。加えて、海が近いので津波などの災害が心配である。治安や災害面からみて安心・安全な場所であってほしい。仕事は地元にも酒田にも支店があるため心配していない。

Fさん) 若者が地域に残れること。

大学を卒業した友達の多くが酒田市から出て行ってしまふ。高校や大学を卒業した学生が酒田市に定着して、街に若者が増えてほしい。若者が活躍する場所づくりや移住定住の促進になる取り組みで、自分が協力できるものがあれば協力したい。

3-3-5 結婚・子育てについて

結婚や子育てに関して、現時点でどのような不安や希望があるかを調査した。

(1) 地元を離れるグループ・・・Aさん・Bさん(将来的にUターン予定)・Cさん

○結婚や子育てに関して、どのような希望や不安があるか。

Aさん) 出産時には自分の地元に戻りたい。出産直後は、自分や結婚相手の実家の近くで過ごしたい。ある程度落ち着いたら、都会と田舎の中間にあたる場所で子育てをしたい。都会過ぎると自由に遊べる公園や施設などが十分に利用できないと思う。田舎過ぎると得られる情報が限られてしまい、子供の進路や選択の幅を狭めてしまうと思う。東京で働き、結婚後は埼玉県や神奈川県、千葉県などに住みたい。子供は2人欲しいが、経済的に考えて不安があれば1人にする。

Bさん) 絶対に東京から地元に戻って、実家か実家のすぐ近くに住みたい。家族のことが心配だし、自分が家を継いで親や祖父母の介護をしたい。東京で結婚相手を見つけた時に、自分の地元について来てくれるかが少し心配。地元に戻ってから結婚相手を見つけるか、東京で東北地方出身者や東北地方に移住したい人を対象とした婚活イベントなどがあれば参加してみたい。

Cさん) 実家には母がいないため、子育てに不安がある。結婚相手の家族に協力してほしい。二世帯居住か核家族かにこだわりはなく、姑さんとの関係によると思う。

(2) 地元に戻るグループ・・・Dさん・Eさん・Fさん

○結婚や子育てに関して、どのような希望や不安があるか。

Dさん) 子育て中は親が近くにいるのが安心する。自分が祖父母に対してよそよそしい子だったため、子供には両親との交流を持たせて、おじいちゃんもおばあちゃんも自分の味方であることや年配の方とのかかわり方を学ばせたい。子供には周りに頼れる人がいる環境で育ててほしい。様々な年代の人と交流して、そこでの出会いから人の気持ちや関わり方などがわかる人になってほしいと思う。結婚後は核家族でいたい。子供に家族のいざこざを見せたくない。自分と両親が仲良くしているのを子供に見せたいから、実家や結婚相手の実家とは程よい距離をとってほしい。

Eさん) 姑さんと仲が良くても、核家族でいたい。結婚相手が実家に嫁に入ってもらいたいと言われたら相談して決めたい。県外に移住してもいいが、街中ではなく子供がのびのび育つのに十分な環境がそろった場所に住みたい。地元を離れても出産や子育ての時期は戻ってきたい。

Fさん) 地元である酒田市にいたい、結婚相手が見つかるかが不安になる。自分の仕事の出会いが少ない業種だと思うし、同じキリスト教の人に出会うことも難しいと思う。結婚出来たら、実家を出て相手の実家に嫁いだり、核家族になってもいい。子供が生まれたら一緒に釣りなどして自然の中で遊びたい。

第四章 インタビュー調査の分析・考察

4-1 インタビュー調査の分析

インタビュー調査の結果を、両グループで比較して共通点や相違点を上げながら分析していく。「仕事・就職活動」の部分は4-2で分析する。

(1) 地元で暮らすことについて

2つのグループを比較すると、地元を離れるグループは地元に戻るグループよりも、地元のことを好きだと思っていないことがわかるが、嫌いだと断言する人はおらず、将来的にUターンを希望する人もいた。

地元の良い面としては、ほとんどの人が地元を”馴染のある場所、ホッとできる場所”と認識していることがわかった。地元の雰囲気や言葉、風景などに安心感を感じる人が多い。その他に、実家で暮らせば生活費が節約できたり、嗜好品に対する必要以上の出費を抑えられるなど、経済面でのメリットが挙げられた。

地元の悪い面としては、仕事や人間関係など様々な角度から”窮屈さ、自由の無さ”を感じていることがわかった。そう感じる原因は人によって異なるが、仕事を選ぶときや実家での生活の中で、周囲から「あなたはこうあるべきだ」などと価値観や立場、むかしの自分に対するイメージなど押し付けられたり、自分の行動に干渉されることから、監視されているような自由の無さを感じているようだ。その他にも、交通の不便さや外出先が限られること、交流できる人が限られることも選択肢のなさ、窮屈さを感じさせている。

(2) 酒田市で暮らすことについて

酒田市が好きかという問いに対して、嫌いだという回答はなかった。大学に対する市からの支援や、地域住民の理解や協力を受けて、地域からの応援を感じている。景色が開けていて、都会過ぎないことから、ゆったりと落ち着いて生活できることを魅力に感じている。庄内地域が地元でない人は、地元と異なる方言や食文化、歴史などを面白いと感じている。また、出身地に関わらず、美味しい水や食の豊かさを魅力とする意見がほとんどの人から挙げられた。

一方、嫌いという回答はなかったものの、「在学中は大学があるから住んでいられたが、大学がなければ住みたい地域だとは思わない」という回答もあった。特に、酒田市外の出身で、卒業後地元に戻る人に共通して「自分はよそ者だと感じる」という回答があった。

地域のワークショップやイベントに参加していても、その1回きりで関係が終わってしまうことが多く、自分が地域に入っていく切り口を見つけられないというものだった。また、「若者向けの観光地や娯楽施設がない、空き家などが怖い、街に若者が少ない」など、活気のなさを示すような回答や、「車がなければ何もできない、公共交通機関が充実していない」など交通の利便性に関する不安も挙げられた。また、地震発生時の津波を心配する声もあった。

(3) 暮らしについて

暮らす場所を選ぼうえで重視することの回答として、両グループにはすこし違いがみられる。地元を離れるグループは、「仕事を選ぼうえで重視すること」とほぼ同じ傾向があり、自分の成長ややりたいことを重視するような回答だった。一方、この傾向は地元に戻るグループ（Bさんを含む）では見られず、仕事があること、公共の施設や交通機関の整備が充実していることなど、家族と生活しやすい環境であることを重視していることがわかる。

現時点で、今後の暮らす場所を変えるつもりはあるかという問いに対しては、変えるつもりだという回答が多かった。回答をよく見ると、両グループとも「一度は地元を離れて働きたい、生活してみたい」という思いが共通して多いことがわかる。地元を離れるグループは将来Uターンを希望するBさんを除いて、地元に戻る可能性は低い。一方、地元に戻るグループは一度地元を離れてみたいと思っているものの、結婚や親の介護のことなどを考えて地元の近くでの生活を望む傾向にある。

地元や酒田市で住む場合何を求めるかについては、“仕事について”、“子育てについて”、“若者の住みやすさ”の3つが重視されているようだ。まず、仕事については、働く場の選択肢が少ないことが挙げられた。仕事を選ばなければ働く場所はあるが、人手不足や職場に若者が少ないことが考えられ、一人当たりの仕事の負担量や人間関係に不安を持っている。また、定年退職後の働く場所を求める回答もあった。次に、子育てについては、子供の人数に応じた手厚い支援のほか、地域からの協力が求められている。特に酒田市が地元でない人は、酒田市で住むことを考えた際、子育てに協力してくれる人が少ないのではないかと、頼れる人がいるだろうかと不安に感じている。最後に、若者の住みやすさについては、大学生活を過ごした酒田市について語られた。他の質問項目でも多く回答された交通の利便性や、若者向けの店や娯楽施設を大学周辺で充実させてほしかったという意見があった。高校や大学を卒業した若者が市に定着して、街に若者が増えることが望まれている。

地元を離れるグループに、地元とどのように関わりたいかを調査した結果、「転出先で地元に関するイベントやアンテナショップなどがある場合、行ってみたい」という回答が多かった。特に、ふるさとの食や祭り、観光などに関心があるようだ。地元に関してほしい情報としては、Uターンを考えた際の転職先や、家族の老後を考えて介護施設の情報などが求められた。

(4) 結婚・子育てについて

結婚、子育てに対する考えは、全体として類似した回答が得られた。特に、家族構成については、夫婦とその子供から成る核家族を希望する人がほとんどであった。自分の実家に住むという意識はほとんどなく、核家族になるか結婚相手の実家に嫁ぐかの二択であり、後者の場合、姑との関係を心配する傾向がみられる。最も多かった回答は、「結婚後は実家を出たいが、実家の近くに住みたい」だった。その背景としては、「子育てに不安があり、自分や結婚相手の実家が近いほうが安心する」という思いと、「両親との程よい距離感を保ちたい」という思いがあるようだ。また、「出産前後は地元に戻りたいが、子育ては地方都市で生活したい」という意見もあり、その背景には都会の持つ良さと田舎の持つ良さの両方を持つ環境で子供を育てたいという思いがある。

家族構成の他に、「結婚相手が見つけれられるのか」という不安や、「子供には自然や周囲の人に恵まれた環境の中でのびのびと育ててほしい」という希望が何人かに共通して見られた。

4-2 学生の就職活動からみる傾向

地元を離れるグループは仕事を選ぶうえで、新しい刺激を受けられることや趣味が充実させられることなど、自分の成長ややりたいことを充実させることを重視する傾向がある。その条件を満たす場所であることが最も重要であり、業界や業種に対するこだわりは弱いようだ。一方、地元に戻るグループは、大学生活での経験を生かせることなど、業界や業種を重視する傾向がある。彼女たちの就職活動の流れを聞くと、活動当初は県外で働きたいという思いがあったが、活動を進めていくうちに地元市町村や県内で働きたいという考えに変化する傾向があるとわかった。

就職活動中の情報収集に関する調査から、ほとんどの人が情報源として大学のキャリアセンターや就職活動支援サイト、企業の説明会などを活用していることがわかった。その他には、就活シェアハウスに住んでみたり、大学の就活サポーターの先輩に相談するなどして情報を集める人もいた。求められた情報としては、各グループで違いがみられた。地元を離れるグループは、「自分と似たような境遇の先輩社会人に、経済的な見通しや暮らしに関する体験談を聞きたい、相談したい」など仕事以外の生活面に関する情報を人と実際に交流して得たいという傾向がみられた。地元に戻るグループは、「先輩の就職活動中の失敗談を聞きたかった、採用試験や資格試験に向けた勉強法を聞きたかった」など就職活動に関する情報を得たいという傾向がみられた。

4-3 地方で暮らすことの魅力と課題

4-1 をもとに魅力と課題を5つの軸に縛らずにまとめていく。

(1) 地方で暮らすことの魅力

地方での暮らしの魅力としては、美味しい水や食材が豊富にあることや、開放的な景色や身近に自然があること、都会に比べてゆったりと落ち着いて生活できることが地元にも酒田市にも共通して挙げられた。

地元で暮らすことの一番の魅力は、慣れ親しんだ場所であることや、家族や友人などの頼れる人が身近にいることから得られる”安心感”だと考えられる。特に、子育ての時期に実家の近くにいたいという人が多く、自分や結婚相手の実家に子育てに協力してほしいという声が多かった。また、地元で子育てをするにあたって、子供が豊かな自然や幅広い年齢層の人との交流から様々なことを経験してのびのびと成長することを期待していることがわかった。また、地元暮らしを経済的な面から見ると、嗜好品への必要以上の出費が抑えられたり、実家に住む場合には家賃や光熱費、食費などが浮くため経済的だという意見が非常に多かった。

酒田市で暮らすことの魅力は、美味しい食材や文化、東北公益文科大学学生に対する地域からの応援だと考えられる。

(2) 地方で暮らすことの課題

地方で暮らすことの課題としては、”仕事”、”人間関係”、”若者が生活しづらいこと”の3つに分けられると考えられる。

まず、仕事に対しては、選択肢が少ないこと、親や親戚が固定的な考えであることが課題だと考えられる。次に、人間関係については、地元での人間関係と酒田市での人間関係で異なる課題と共通の課題がある。地元に対しては、今までの自分に対するイメージが固定されていること、親や周囲からの干渉が多いことなどが課題だと考えられ、酒田市に対しては、大学以外で地域に入っていき切り口が見つけづらく、頼れる人が地域にいないことが課題だと考えられる。共通の課題としては、地域に結婚相手がいない、出会いがないと思っている人が多いことだと考えられる。若者が生活しづらいことについては、公共交通機関が充実していないこと、若者向けの娯楽施設や観光地が少ないことだと考えられる。

4-4 地方での暮らしに向いている人の特徴

今回のインタビューの結果をもとに、筆者の考える地方での暮らしに向いている人の特徴を述べていく。対象者の性質から、以下に述べる特徴は、厳密には、地方出身者であり、地方での暮らしに向いている人の特徴だといえる。

地方での暮らしを考えた場合、暮らす場所としては、やはり地元が圧倒的に支持される。

地方での暮らしの魅力として挙げられる”安心感”が、見慣れた風景や家族、友人などから得られることがその背景だと考えられる。また、子育てや親の介護など、家族の将来について考えていることも、Uターンする人の特徴だといえる。

今回、酒田市への移住に関するインタビュー結果から、Iターンには人間関係が最も心配されることがわかった。そのため、Iターンに向いている人の特徴としては、人との交流が好きな人、地域に頼れる人や自分の居場所を見つけられる人、働きたいと思える職場がある人などが考えられる。特に、頼れる存在として結婚相手が多く挙げられたことから、地域に結婚相手がいる人はIターンしやすくなると考えられる。

また、地元かどうかを問わず、子供がのびのびと成長できる環境や、美味しい水や食材が豊富であることを重視することが地方での暮らしに向いている人の特徴だといえる。

以上を踏まえて、それぞれの特徴にあった移住促進の方法を考えていく必要がある。続く第五章では、これまで述べてきたことを踏まえながら、本学のある酒田市を例にこれからの酒田市に合った”若者のU I ターン促進のためにできること”を自分なりに提案していく。

第五章 酒田市における移住について

5-1 酒田市の概要

(1) 酒田市の概要

酒田市は山形県の北西部、最上川が日本海にそそぐ河口に位置し、東西 54.5 (33.7) km、南北 48.3 (35.5) km、面積 602.97 km²であり、北西約 39 km海上に離島、飛島を有する¹⁴。表 4 は、酒田市の人口と世帯数を表す表である。

表 4：平成 28 年 11 月 30 日現在 住民基本台帳人口と世帯数

項目	計	男	女	構成比 (%)
人口総数	105,534	50,081	55,453	
うち 0~14 歳	11,866	5,994	5,872	11.2
うち 15~64 歳	58,580	29,577	29,003	55.5
うち 65 歳以上	35,088	14,510	20,578	33.2
世帯数 (世帯)	41,920			

出典：酒田市ホームページ「統計資料 酒田市の統計資料」を参考に筆者作成。

平成 24 年 10 月～平成 25 年 9 月の年齢別の転入・転出者数は、酒田市全体の転出超過数 382 人に対し、18～22 歳の転出超過数だけでそれを上回る 421 人となっている。その原因は若者の市外流出である。市外への転出者数は高校を卒業する 18～19 歳に多く、市外から

¹⁴ 平成 28 年度版「酒田市都市計画」(p.1) を参考に執筆。

の転入者数は大学を卒業する 22～30 歳くらいの若者層が多い。(酒田市まち・ひと・しごと創生総合戦略第 1 部 酒田市人口ビジョン p.16 を参照)。以下は、18～22 歳の転入・転出者数を表す表である。

表 5：平成 24 年 10 月～25 年 9 月の 18～22 歳の転入・転出者数

年齢	転入	転出	社会移動
18	22	199	△177
19	61	238	△177
20	59	74	△15
21	71	91	△20
22	92	124	△32
合計	305	726	△421

出典：酒田市まち・ひと・しごと創生総合戦略第 1 部 酒田市人口ビジョン p.16

図表 16 を参考に筆者作成。

5-2 酒田市の移住定住促進に関する取り組み¹⁵

酒田市は、企画振興部政策推進課内に移住相談窓口を設けている。窓口や酒田市ホームページ、移住相談総合サイトでは、住まいや仕事、福祉、子育てなどの生活に関する酒田市の支援や移住者体験談、酒田市プロモーションビデオ、県内外のイベントなどの情報が多く紹介されている。

移住相談総合サイトでは、住まい、はたらく、農業、福祉、子育て・教育、観光の項目で情報が紹介されている。福祉や子育てなどの項目は移住者に関係なく利用できるものが多い。また、U I J ターン雇用奨励金など、事業主を対象とした助成金などにも取り組まれている。そのためこの論文では、支援内容はここに挙げられていないものもあるが、特に移住者向けだと思う項目を取り上げてまとめた(表 6)。

¹⁵ 酒田市役所ホームページ 「移住相談総合窓口」、酒田市「酒田市で暮らす」を参考に執筆。

表 6：酒田市の支援内容

項目	主な支援内容
<住まい> 住まいに関する市の情報や空き家情報	<ul style="list-style-type: none"> ・ 空き家改修費補助金 ・ 移住定住住宅取得補助金 ・ 住宅リフォーム総合支援事業 ・ 住宅改善支援事業
<はたらく> 市の企業等に就職したい人、働く意欲がある人を支援するための情報	<ul style="list-style-type: none"> ・ U I J ターン定着激励金 ・ U I J ターン人材バンク ・ U I J ターンコーディネーターを設置
<農業> 酒田での農業体験やグリーンツーリズム、相談窓口などの情報	<ul style="list-style-type: none"> ・ 青年就農給付金 ・ さかたでアグリ支援事業 ・ 就農・農地取得相談窓口 ・ 農業技術・体験情報

出典：酒田市ホームページ「酒田市移住総合サイト」を参考に筆者作成。

移住者が対象である支援制度の中には、年齢や家族構成によって助成金や激励金の金額が異なるものがある。特に本論文と関係の深い「はたらく」に関する3つの支援事業を取り上げて説明する。

まず、U I J ターン定着激励金¹⁶の制度について説明する。この制度では、U I J ターンによる地元定住促進のために、庄内北部定住自立圏域内（酒田市、三川町、庄内町、遊佐町）の事業所に正規雇用されたU I J ターン就職者であり、県外で1年以上住所を有した後酒田市内に転入していること等の要件をすべて満たす人を対象者とし、激励金を支給している。次に、U I J ターン人材バンク¹⁷について説明する。U I J ターン人材バンクでは若者の市内就職の促進や市内企業の人材不足の解消、産業振興を目的として、登録された就職希望者と市内求人企業に互いの情報を公開したり、イベント情報を発信している。双方の希望が一致した場合には、面接日程を調整するなど、紹介・斡旋をしている。最後に、U I J ターンコーディネーターの設置¹⁸について説明する。コーディネーターは、酒田市商工観光部商工港湾課酒田市無料職業紹介所に設置され、首都圏などからの転入就職促進に取り組んでいる。職務内容としては、転入求職者に対し助言や相談などの就職支援を行い、それに伴い求人・求職に関する情報収集、県外人材の情報取得及び情報発信の企画や運営などが挙げられる。

次に、表 6 に挙げていない、移住者が市での生活を体験できたり、先輩移住者や地域の

¹⁶ 酒田市ホームページ（2016）「就職したいあなたへ」を参考に執筆。

¹⁷ 酒田市ホームページ（2017）「UIJ ターン人材バンク」を参考に執筆。

¹⁸ 酒田市（2015）「酒田市 UIJ ターンコーディネーター設置要綱」を参考に執筆。

人と交流できる2つの取り組みを紹介していく。

○ショートステイプログラム「ABEBA（あべば）」¹⁹

酒田市に移住を考えている人向けに短期的に移住体験してもらうプログラムであり、「あべば」は酒田市の方言で「来てみたら？」を意味する。このプログラムでは、先輩移住者との交流会や農業体験、季節ごとのイベントへの参加などができる。2016年のショートステイプログラム「ABEBA SUMMER」では、8月上旬に2泊3日で募集定員3組で開催された。対象者の応募要件は、酒田市への移住や二地域居住を検討している人から、田舎暮らしを体験してみたい人など、幅広い人が対象となる。参加費は、現地までの交通費や食事代、観光施設などの入場や体験にかかる費用を除いて一人当たり1万円となる。「ABEBA SUMMER」では、酒田港まつりを楽しんだり、空き家見学ツアーや地元企業の会社訪問、OB移住者交流会、農業・自然体験などに参加することがプログラム内容となった。宿泊先は、移住体験ゲストハウス「ショウナイベース」になる。この施設は、スタッフで空き家をセルフリノベーションした手作り感のある施設になっている。

○移住者交流会

庄内に移住した人、移住を考えている人、そんな人と交流したい人など様々な段階の人が交流する、移住者交流会が定期的で開催されている。移住するまでの不安、移住後の不安を共有しながら、気軽に話し合える場になっている。2015年10月から交流会が始まり、山形県の秋の風物詩である芋煮会や、豪雪地での除雪ボランティアと寒鰯汁づくり、釣り大会とバーベキューなどを通して交流を深めている。

筆者自身もこの交流会に計3回参加しているが、移住者や移住希望者の移住前の生活や、酒田市で暮らす中でやりたいことなどを多くの方から教えていただいた。交流を重ねるうちお互いの顔や名前を覚えて、つながりの輪が広がっていくことが実感できる場であり、移住者にとって安心できる場所になっていると思う。

5-3 酒田市へのU I ターン促進のための提案

第四章を参考にしながら、I ターン促進とU ターン促進と定住促進の3つの視点から、筆者が考えるターゲット像と促進のためにできることを提案したい。

(1) I ターン促進

ターゲット像：酒田市で暮らした学生。人との交流が好きで、地域活動や周囲の人とのつながりの中から、地域の中に頼れる存在や自分のやりたいことなどを見つけようとして

¹⁹ 株式会社 ainak web ページ「Short stay program-山形県庄内地方（酒田市、鶴岡市）での田舎暮らし-」を参考に執筆。

る人。

酒田市で暮らした学生が市に定住していくためには、地域との交流を通して、市の中に自分の居場所や残りたいと思わせてくれる魅力を見つけられることが鍵となる。インタビュー結果により、学生が卒業後に市に残るためには、仕事と在学中の地域との関係が大きな影響を与えることがわかった。それぞれについて以下のことを提案したい。

①仕事について²⁰

卒業後、新社会人となる学生にとって切っても切り離せないのが仕事である。インタビュー調査によると、地方は仕事はあるが、選択肢が少ないという声が多かった。また、多くの学生は就職活動支援サイトを情報源としており、酒田市限定で就職したいと考える学生でない限り、市の企業について知るきっかけは少ないと考えられる。就職活動に関するインタビュー調査によると、サイトの情報だけでなく、実際に職場に足を運んだり、先輩方に話を聞くなど、直接かかわって自分の目と耳で得た情報を重要視する傾向もみられた。本学では、平成24年から社長インターンシップというプログラムに取り組んでいる。このプログラムは、地元企業の経営者にかばん持ちのように密着し、経営者の背中を見て学ぶことができる。このことは、学生に身近に魅力的な企業があることに気づく場を与えると同時に、インターンシップを受け入れる中小企業に優秀な若者と出会う場を与えているといえる。このプログラムには今後も継続して力を入れていくとともに、協力企業や参加する学生にこと活動を広めていくことが求められる。さらに酒田市が学生に市で働くことをアピールするためには、大学と企業、行政が協力して、少人数で実際に市内で働く方とじっくり交流できる機会をこまめに設けることが必要だと考えられる。特に、業種にこだわりのない学生や就職活動を始める時期の学生と早い段階で交流することで、職場研究や市への関心が深まり、より市での定住が現実的になるだろう。

②在学中の地域との関係について

在学中に、地域の中に頼れる存在や自分の居場所、惹きつけられる地域の魅力などを見つけるためには、学生と地域が出会う場所が必要であり、人と人の交流が重要である。インタビューでは、地域に入っていくきっかけとして授業や祭りなどの行事が挙げられたが、参加しても自分はよそ者だと感じるという回答があった。それは、その交流が一時的なものであったり、自分と共通点が少ない人との交流であることも原因の一つだと考えられる。地域に入っていくには、授業のような堅苦しさやイベントに参加するだけの継続性のない交流ではなく、学生が気軽に、楽しみながら自分のペースで地域との関係性を築ける環境が必要だ。特に、年齢の近い他大学学生や専門学校生、中高生や、酒田市で暮らす先輩インターン者との交流が地域の中に”仲間がいる安心感”を見つけるきっかけになるだろう。

²⁰ 企業物語メディア BigLife21 「東北公益文科大学 | 東北の若者よ、都会の大企業もいいが…地元の「憧れの背中」を見落とすな！」を参考に執筆。

学校祭やサークル活動、アルバイト、ボランティアなどをきっかけに交流することは可能だ。交流を通して、地域に本学学生以外にも同年代の若者がいることや、先輩が市で生活している様子を知ることができれば、卒業後に地域での孤独感や不安感を軽減できるだろう。例えば、子育て支援センターでのイベントなどに学生がボランティアとして加わり、市で結婚し子育てしていく姿や周囲のサポートを目の当たりにする。これにより、インタビューでも特に多かった子育て時に地域で孤立するのではないかという不安も軽減が期待できる。

(2) Uターン促進

ターゲット像：地元に着愛を持っていて、仕事や結婚などのきっかけがあれば地元に帰りたいという段階にある人。高齢になった親の介護や子供の教育環境などに関心があり、家族と地方での生活を望んでいる人。

地元へのUターンを促進するためには、帰ってきたときに働きたいと思える仕事があることや、家族と生活しやすい環境が整っていることが必要だとわかった。これを踏まえて、以下のことを提案したい。

①仕事について

地元へ帰る際に、仕事があることは必要不可欠である。転出先から地元に通って就職活動することはUターン希望者にとって負担が多いと考えられる。インタビューによると、就職活動の中で実際に住んでみた感覚や人との交流から得られる情報を重視することがわかった。そこで、地元での就職活動中に利用できるシェアハウスの設置を提案したい。設置場所は、駅周辺や市の中心部周辺が利用しやすいと考えられる。シェアハウスでは情報収集しやすい環境を整備するとともに、5-2で取り上げたU I Jターン人材バンクやU I Jターンコーディネーターとも連携し、市内の企業とのマッチングを行ったり、就職や起業に向けた相談会などを開催する。また、Uターン後の経済的な見通しをプランニングするイベントや、先輩Uターン者との交流会などを開催することで具体的に地元で暮らしていくことを想像でき、Uターンの実現につながるだろう。インタビュー結果では、情報収集の手段として就職活動支援サイトの利用率が高かったことから、市独自の就職活動支援については、SNSや広報、市外での移住に関するイベントや相談窓口などを活用して、情報発信を強化していく必要がある。

②家族と生活しやすい環境について

Uターンのきっかけとして、家族の変化は大きく影響する。インタビューの中でも、子育てや、親の介護が必要になったことをきっかけに、地元へ帰りたいと考える人が多いことがわかった。転出先で、これから地方で家族と生活することを検討した際に、地元を選んでもらうためには、Uターン希望者本人だけでなく、移住後共に生活していく家族から

も酒田市への移住に前向きになってもらわなければならない。そのためには、Uターン希望者に酒田市にいる家族から移住に関する情報を共有してもらったり、一定の期間、移住を検討している家族に酒田市での生活を体験してもらうことが効果的だと考えられる。現在、酒田市では、帰省者が大きい1月と8月の広報で移住に関する特集を組んでいたりと、5-2で取り上げたショートステイプログラムに取り組んでいる。今後は、子育て支援や介護に関する支援を充実させるとともに、それらの情報をターゲットに向けて効果的に発信していく必要がある。インタビューで求められた支援としては、子育てに関する支援が特に必要だという結果になった。具体的には、経済的に子供を複数持つことに不安が挙げられたことから、人数に応じて手厚い支援を受けられる仕組みを強化することが効果的だと考えられる。加えて、生活に欠かせない学校や病院などの施設が身近にあることや、Iターン者の場合には地元ですぐに帰省できるように遠方への公共交通機関の充実が必要だといえる。

(3) 定住促進²¹

ターゲット：結婚や仕事を機に酒田市に移住したIターン者。特に、酒田市で結婚し、子供を育てていきたいと考えている人。地域について知りたい、頼れる仲間が欲しいと考えている人。

最も定住支援が必要なのは、結婚や仕事を機に移住したIターン者だと考えられる。結婚や仕事が移住のきっかけである場合、酒田市で心地よく暮らしていくためには、地域へ入っていく切り口と、職場や家族以外にも地域で頼れる人の存在が必要だと考えられる。

インタビュー結果では、地方での子育てに魅力を感じている反面、子育て中に相談できる人、頼れる人がいないことを不安に思う人が多いことがわかった。この結果は、インタビュー対象者がまだ学生であることも影響しており、卒業後の生活を通して、職場の同僚や友人ができることで少しずつ軽減されていくと予想できる。しかし、知らない土地で子育てをすることに不安があるのも事実だ。例えば、出産直後や、すでに子供がいてIターンする場合には、市に慣れてから妊娠・出産・子育てをする場合よりも地域に馴染んでいく機会が限られるのではないだろうか。酒田市のHPや庄内子育て応援サイトを見ても、様々なイベントや支援、個別の相談などが受けられることがわかるが、移住者が持つ不安をテーマにしたものは見つけられなかった。この不安を軽減するために、酒田市に嫁いだ移住者同士で交流会などを開催することを提案したい。ヤマガタ未来ラボHPでは、山形県に県外から嫁いだ女性のIターン者たちが支えあいながら山形県での暮らしを楽しむ「エラとづ」の会が紹介されている。「エラとづ」の由来は「えらい所に嫁いだ」であり、不定期ではあるが交流を重ねている。筆者が提案する交流会でも、日常で感じた方言や文化の違い

²¹ ヤマガタ未来 Lab.WEB ページ「山形コラム | 山形にIターン・県外から嫁いだ女性が支え励まし合い、山形の暮らしを楽しむ「エラとづ」の会」、庄内子育て応援サイト TOMONI WEB ページを参考に執筆。

の面白さや失敗談などを共有することで、地域に仲間がいることや頼れる先輩移住者がいることで地域に馴染んでいくことができるだろう。更に、交流会での気づきを子育て支援センターや5-2で取り上げたショートステイプログラムなどでも共有することを提案する。これにより、市内で地域に馴染めずにいる家族の心地よい定住生活をサポートしたり、これから移住してくる家族の不安の軽減が期待できるだろう。加えて、人間関係のほかにも、(2)の後半で述べたようなIターン者が地元に戻るために公共交通機関の充実や、その他生活を始める際にかかる費用に対する補助金等の充実も必要である。

このように、先輩移住者や地域住民が協力しあうことで、定住の促進が期待できる。また、このことから、移住者支援の体制が整っていき移住希望者をより受け入れやすくなると考えられる。

おわりに

私は、生まれてから現在まで山形県で暮らしており、地元も酒田市も大好きだ。大学生生活を経て、飛島での授業や酒田市の移住者交流会などに参加して多くの移住者たちと出会うことができた。これらの出会ったことをきっかけに、若者の移住について関心を持ち本論文に取り組んだ。暮らす場所を選ぶということは、人生の中で大きな選択の一つだと思う。近年、地方での人口減少に対する不安の高まりがみられるが、同時に、地方での生活を魅力的だとする声も高まっている。これを受けて、各自治体の移住者受け入れ体制が強化され、様々な移住定住の促進に関する取り組みが行われている。本学学生へのインタビュー調査を通して、補助金や助成金などの支援制度や公共交通機関の充実を求める声が多いことが改めて分かった。それに加えて、地方での生活に対する不安要素として、仕事や人間関係などの存在が大きいことが明らかになった。その不安を軽減する方法としては、実際に地域で働く人や先輩移住者、自分と似た境遇にある人との交流などが効果的だと考えられる。自分が暮らしていく場所に何を求めるかは、これまでの経験や考え方、年齢、性別、家族構成などによって異なり、地域や周囲の人がそれらを変えることは難しい。そのため、地域に若者の移住者を増やし定住につなげていくためには、移住者の心境を理解しながら、彼らを迎え入れる環境が整っていることを人と人との交流をもって発信していく必要がある。

地域住民が地域に愛着や誇りを持ち、生き活きと生活している地域はとても魅力的だ。このことは、住んでいる人の流出を抑えたり他地域から人を引き寄せる力があると思う。これからも、若者のU Iターンに関する動向に注目し、自身も地元や酒田市の魅力を出会った人に発信、共有するなど、研究を続けていきたい。

謝辞

私の卒業論文を担当し、様々なことを経験させてくださった呉尚浩教授、インタビューに快く協力してくださった6名の学生のみなさん、共にゼミ活動に取り組み、多くの意見やアドバイスをくださったゼミ生のみなさんのご協力により、卒業論文を書き上げることができました。みなさまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

<参考・引用文献>

- 阿部真大（2013）『地方にこもる若者たち 都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新聞出版
- 小田切徳美・筒井一伸（2016）『シリーズ田園回帰3 田園回帰の過去・現在・未来 移住者と創る新しい農山村』一般社団法人 農山漁村文化協会
- 笠原真澄（2001）『田舎がきゅうくつなひと 都会がきゅうくつなひと』有限会社サンクチュアリ・パブリッシング（サンクチュアリ出版）
- 学校法人東北公益文科大学（2005）『公益学の誕生とともに。 第一期生卒業記念誌 [4年間の軌跡編]』アルバム編集委員会
- 学校法人東北公益文科大学（2017）『CAMPUS GUIDE 2017』学校法人東北公益文科大学
- （財）東北産業活性化センター（2009）『地域資源を生かす滞在型ビジネス』株式会社日本地域社会研究所
- 東北電力株式会社地域交流部（2003）『Re: 地域情報発信ムック 2003 地域から吹く風、熱くて、ひたむきな新しい時代のレスポンスを聴いて欲しい』株式会社ぎょうせい
- 東北文化研究センター（2014）『東北学 04』株式会社はる書房
- 長田攻一・田所承己（2014）『<つながる/つながらない>の社会学 ― 個人化する時代のコミュニティのかたち』株式会社弘文堂
- 農山漁村文化協会（2005）『若者はなぜ、農山村に向かうのか 現代農業 10月増刊号』農山漁村文化協会
- 矢崎栄司（2012）『僕ら地域おこし協力隊 未来と社会に夢をもつ』株式会社学芸出版社
- ヤマガタ未来ラボ（2015）若年者U・Iターン強化支援事業 実施報告書 『若者のU・Iターンガイドブック～若者と地域の関係性づくり～』（ガイドブック）ヤマガタ未来ラボ
- 百合田敬依子・阿部道彦・五十嵐映子・蜂屋基樹・廣瀬瑞恵（2015）『|むら・まちづくり 総合誌 | 季刊地域』SUMMER 2015 No. 22 現代農業 8月増刊号 一般社団法人 農山漁村文化協会
- 吉川光洋（2011）『農村地域への移住者の増加と歴史的変遷-UIJ ターン概念の発生と政策

的対応-』愛知江南短期大学地域協働研究所年報第7号 地域協働
吉川徹・熊倉純子・玄田有史・神門善久・小島多恵子・狭間諒多朗・渡辺靖 (2014)『河出
ブックス 075 「地元」の文化力ー地域の未来のつくりかた』株式会社河出書房新社
読売新聞生活情報部 (2008)『つながる 信頼でつくる地域コミュニティ』全国コミュニテ
ィライフサポートセンター (CLC)
KF 書籍化プロジェクト (2012)『学生まちづくりの奇跡〜国立発！一橋大学のコミュニ
ティ・ビジネス』株式会社学文社

<参考・引用 WEB ページ>

秋田県ホームページ「Aターン就職を応援します！！(U・I・Jターン就職支援情報)」
<http://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/3137> (参照：2017. 2. 18)
公益財団法人秋田県ふるさと定住機構「ふるさと定住機構とは」
<http://www.furusato-teiju.jp/about/> (参照：2017. 2. 18)
一般社団法人 移住・交流推進機構 JOIN「田舎暮らし特集 | Uターン/ Jターン/ Iターン」
<http://www.iju-join.jp/feature/guide/003/02.html> (参照：2016. 12. 27)
色川地域振興推進委員会ホームページ「ええわだ！色川」
<http://wakayama-irokawa.com/eewadairokawa/> (参照：2016. 2. 10)
色川地域振興推進委員会ホームページ「ふるさと色川」
<http://wakayama-irokawa.com/> (参照：2016. 2. 10)
企業物語メディア BigLife21 「東北公益文科大学 | 東北の若者よ、都会の大企業もいいが
…地元の「憧れの背中」を見落とすな！」
<http://biglife21.com/industry-university/3101/> (参照：2017. 2. 23)
国土交通省「国土交通白書 2015 第2章 本格的な人口減少社会における国土・地域づく
り 第1節 ヒト・モノ・カネ情報の流れ」
<http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h26/hakusho/h27/html/n1211000.html> (参照：
2016. 2. 19)
国土交通省 (昭和 52 年)「第三次全国総合開発計画」
<https://www.mlit.go.jp/common/001135928.pdf> (参照：2017. 2. 15)
酒田市「酒田市で暮らす」(酒田市移住ガイドブック)
[http://www.city.sakata.lg.jp/shisei/ijyu/ijusodansogomadoguti.files/ijuguidebo
ok.pdf](http://www.city.sakata.lg.jp/shisei/ijyu/ijusodansogomadoguti.files/ijuguidebo
ok.pdf) (参考：2017. 1. 4)
酒田市 (2015)「酒田まち・ひと・しごと創生総合戦略 第1部 酒田市人口ビジョン」
[https://www.city.sakata.lg.jp/shisei/shisakukeikaku/kikaku/sougosenryaku/senry
aku.files/bunkatsu2.pdf](https://www.city.sakata.lg.jp/shisei/shisakukeikaku/kikaku/sougosenryaku/senry
aku.files/bunkatsu2.pdf) (参照：2017. 1. 8)
酒田市 (2015)「酒田市 UIJ ターンコーディネーター設置要綱」
<http://www.city.sakata.lg.jp/jyorei/act/frame/frame110001804.htm> (参照：2017. 2. 17)
酒田市 (2014)「平成 26 年度 酒田市人口減少対策 (若者定着等)に係る総合的な展開」

<https://www.city.sakata.lg.jp/shisei/shisakukeikaku/kikaku/sougosenryaku/jinkouugensyo.files/genjoutokadai-syakaigen.pdf> (参照：2017. 1. 7)

酒田市 (2016) 「平成 28 年度 「酒田市の都市計画」」
<http://www.city.sakata.lg.jp/jyutaku/toshikeikaku/toshikeikakugaiyou/h28toshikeikaku.files/H28sakatasinotosikeikaku0.pdf> (参照：2017. 1. 8)

酒田市ホームページ「移住相談総合窓口」
<http://www.city.sakata.lg.jp/shisei/ijyu/ijusodansogomadoguti.html> (参考：2017. 1. 4)

酒田市ホームページ (2016) 「就職したいあなたへ」
<http://www.city.sakata.lg.jp/sangyo/roudo/koyosokushin/syuusyokusitai.html> (参照：2017. 2. 17)

酒田市ホームページ (2017) 「UIJ ターン人材バンク」
<http://www.city.sakata.lg.jp/sangyo/roudo/koyosokushin/uijturnjinzaibank.html>
(参照：2017. 2. 17)

酒田市ホームページ「まち・ひと・しごと創生に関する“若い世代”の意見交換会」
<http://www.city.sakata.lg.jp/shisei/shisakukeikaku/kikaku/sougosenryaku/ikenkoukan.html> (参照：2017. 1. 3)

首相官邸 内閣府地方創成推進事務局「地方再生計画 1 地域再生計画の名称 さかたへの移住定住促進」
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/tiikisaisei/dai39nintei/plan/a113.pdf>
(参照：2017. 1. 7)

庄内子育て応援サイト TOMONI WEB ページ
<http://shonai-tomoni.jp/support/counseling/> (参照：2017. 2. 23)

総務省「移住・交流 関係資料」
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi.../c.../kasokon20_01_02_s5.pdf (参照：2016. 2. 9)

総務省「都市から地方への移住・交流の促進に関する調査」
http://www.soumu.go.jp/main_content/000078625.pdf (参照：2016. 2. 9)

特定非営利活動法人地球緑化センター「地球緑化センターとは」
<http://www.n-gec.org/about-us/> (参照：2017. 2. 19)

公益財団法人東北活性化研究センター「2015 年度 東北圏社会経済白書 第Ⅱ部 若者の移住・定住促進」
<http://www.kasseiken.jp/pdf/library/guide/27fy-chosa-02-02.pdf>
(参照：2017. 1. 7)

公益財団法人東北活性化研究センター「平成 27 年度調査研究事業一覧」
<http://www.kasseiken.jp/business/investigation/2015.php> (参照：2017. 1. 7)

学校法人東北公益文科大学ホームページ「大学総合案内」

http://www.koeki-u.ac.jp/about_us/information/ (参照：2017.1.8)
農林水産省「移住・定住対策 取組事例 島根県邑南町」
http://www.maff.go.jp/j/nousin/seibi/sogo/s_seibi/.../jinkou_jirei02.pdf (参照：2017.1.3)
農林水産省「地域活性化に向けた取組の事例」
http://www.maff.go.jp/j/nousin/nouson/bi21/pdf/siryoul_140825.pdf (参照：2016.12.27)
福島県 F ターン WEB ページ「初めての方へ」
<http://www.f-turn.jp/info/guide.html> (参照：2017.2.19)
認定NPO法人ふるさと回帰支援センターホームページ「ふるさと回帰支援センターのご紹介」
<http://www.furusatokaiki.net/about/> (参照：2017.1.8)
山形県「庄内地域における若者定住促進に向けて」
<http://www.pref.yamagata.jp/ou/sogoshicho/shonai/...--/wakamonohokoku.pdf> (参照：2016.11.15)
山形県(2016)「平成27年 山形県の人口と世帯数－山形県社会的移動人口調査結果報告書－平成27年国勢調査結果概要(速報値)－」
http://www.pref.yamagata.jp/ou/kikakushinko/020052/data/jink/H27nennpo/H27_all_page.pdf (参照：2017.1.6)
ヤマガタ未来Lab.WEB ページ「山形コラム | 山形に I ターン・県外から嫁いだ女性地が支え励まし合い、山形の暮らしを楽しむ「エラとづ」の会」
<https://mirailab.info/column/8951> (参照：2017.2.22)
株式会社ainak WEB ページ「Short stay program-山形県庄内地方(酒田市、鶴岡市)での田舎暮らし-」
<https://www.ainak-net.com/short-stay-program/> (参考：2017.1.4)